

平成31年4月25日(木)

ゴールデンウイーク

さあ、10連休が待っております。教員になって初めて10日間も五月初めに休みが続くなんてありえないことでしたが、教員最後のゴールデンウイークにこんなことが待ちかねようとは思いませんでした。

といっても、きっと毎日のように学校に来て野球の試合を見たり、部活動を見学したり、校長便りを書き溜めたりして過ごすのは目に見えているのですが。教員になってから部活動や課外で休みの日でも学校に行くのは当たり前であったので、今もそんな習慣を続けております。これで、逆に退職したら行くところがなくなって苦しむのが想像に難くないのです。

ゴルフの練習や釣りをするとか趣味の時間といっても、一日中するのは飽きてしまうでしょうし、畑の草取りをしても散歩をしてもランニングをしても書店回りをしても1日ずっと続けられるか、365日ずっと続けるのかは難しいことでしょう。

その点、学校は毎日やってきても、何かすることはたくさんあって、特に生徒という相手がいた場合、その時間は何をどう行ったとしても無限にやることは存在し、いくら時間があっても足りないというのが現状ですので、学校は来ていさえすればあつという間に一日が過ぎていき、毎日来ていても飽きることがなく、様々な仕事で満ち溢れていくのです。

そんなことをするから働き方改革ができないのだ、多忙化解消ができないのだとお叱りを受けることはもっともなことです。ただ、生徒が目の前にいた場合、こんなことはどうだ、こんなことをするとどう考える、こんなことに取り組んだら結果は同じなのかというようなとりかかりをすれば、それは時間がいくらあっても足りなくなるもので、相手が一人から二人三人と増えていくだけでそのバージョンも増えていくのです。

よく研究生活を送っている方が顕微鏡をずっと見ているということと似ているかもしれません。もはや生徒を相手に様々なことをトライすることが自分の研究対象なのですから。その結果、うまくいくともっとうまくいくためにはと考えるでしょうし、うまくいかないとしたらどのようにすればうまくいくのかと考えるわけですので、時間はあつという間に過ぎていくのです。

その限度をいつどこで作るのが難しいのです。働き方改革とか多忙化解消ができないのは、自分でそれが決められないということだと思います。なぜなら、相手が生徒だからです。自分の都合より生徒の都合が先行した時、時間はいくらあっても足りなくなるのです。

いつどこで、その限度を構築するかが今の教員の一番の課題なのです。

